



Schützt die Augen! Tragt Schutzbrillen!

COLUMN

鎌倉の猫事情 第十話

耳をすますと、つくつく法師の鳴き声が聞こえてきます。一週間ほど前まで圧倒的な勢力を誇っていたあぶら蟬の声はもうほとんど聞こえてはきません。あぶら蟬とつくつく法師の交代は、夏の気温の変化で行なわれるという話です。盛夏を過ぎて気温がわずかながら下がって来るとあぶら蟬はいなくなり、代わりにつくつく法師が登場するというわけです。今年のすざまじい猛暑に、鎌倉でもつくつく法師の登場はいつもより少し遅れたようです。いつもなら甲子園の球児たちが決勝選を終え涙にくれて土をもち帰る頃、始まるかと記憶していますが、今年は8月ももう幾日もなくなつてから、ようやくつくつく法師の声が聞こえてくるようになりました。今、夏の王者あぶら蟬も、ついに力尽きて木から落ちて来ます。路上にも、庭先にも、窓を開け放している部屋の中まで、まるで天から降ってくるかのようにばらばらと音をたてて落ちてきます。力を出しきった勇氣あるものの死です。しかし、猫達は決して容赦はしません。文字通り虫の息となった瀕死のあぶら蟬を毛糸玉代わりにもて遊び、相手が動いているうちはとことん追い詰め、果ては羽と胸をあっちこっちとばらばらにして捨て置き、ピクとも動かなくなると飽きて見向きもしない。実際情け容赦のない仕打ちです。先代のシュガーちゃんは、小柄ながら狩猫の名手(名猫?)でした。瀕死の蟬も見逃さなかったけれど、生きた雀やすばしっこい蛙を猫パンチ一発でしとめて傷の少しもない獲物を啜え、ライオンのような風格で堂々と歩いていました。代わりしたグーニー君は、ジャンプ力とすばしっこさはかなりのものですが、勇氣の点ではまだまだ先代にはかなわないようです。つい最近まで、対等に戦えるのは弱った蚊ぐらいのものでした。あぶら蟬が落ちてきて命の最後の抵抗をしめしているような時には、ものかげに隠れて見守っていたものです。とは言うものの、かなり長い間階段が降り



HOT NIGHT

暑い…なんて寝苦しい晩だ。腹立ちまぎれに掛けていた布団を天井に向かって蹴り上げた。足が宙を泳いだその時、空中で何かが足にからまった。…な、なんだ？ 『君！なんだ。私の衣装を引っ張ったりして、私に何か用かね？』 聞き覚えのある声に、薄目を開けて見上げると、いつかの悪魔が不機嫌そうにざらりと目を光らせて私を見下ろしている。 『特に用というわけではないですが…』 『用がないなら引き止めないでくれたまえ。こう見えても私は忙しいのだからね。悪魔のふて腐れた言いように、連日の熱帯夜でたまりにたまった寝不足の不満が一気に爆発した。 『こう見えてもって…そういう言い方はないでしょう！ だいたいこの部屋を通り道として使わせて欲しい頼んで来たのはあなたの方でしょう？ いつだって勝手気ままにに風を起して通り過ぎて行かれるのには、実のところ迷惑しているのですからね。 『ほっほう？ 言ってくれるじゃありませんか。君がここは自分の部屋だと思うのは自由だ。しかし我々の世界ではここは誰のもの、あそこは誰のものなんて認識はないんでね。我々が無断で通っては君も気が悪かろうと思う親切心で知らせてあげたまでなのだ。そうまで言うなら勝手にさせてもらおうか！』 悪魔は黒いマントをひろげて威嚇している。 その様子には私は多少自分の状況が不利なことに気がついた。 『…少し言いすぎたました。何しろこの暑さですから…』 私が下手に出ると、悪魔はマントをいからせるのをやめて言った。 『ふむ、確かに暑い。まあ、いいでしょう。私だってここが君の部屋だということ、あながち頭から否定する気はないのだからね。 『ああ、よかった…ところでその衣装どうしたんです？ 普段はそんな格好はしないのでしょうか？』 『ふむ、いや、これはちとわけありでな。わからずやの人間のところへ行く途中なのだ。 『はっははあ…そんな格好で人間を脅して、言う事を聞かせようというわけですか？ 悪魔は目だけを出した三角頭巾をすっぽり被り、大きな鎌まで手にしている。 『いや…なに、その…お互い深い事情にまで関わりあうのはよそうじゃないか。ここは確かに君の部屋だ。私はなるべく君や猫達を起こさないように時々通る。それでいいじゃないか？ 悪魔はバツが悪そうにしている。 『ふ～ん。ところで、前に会った時は、たしか私にお礼をしてくれるって言ってましたよね。 『そんなことは言わない。言うわけがない』 悪魔はきっぱりと否定した。 『確かに、そのうち何か一つ望みをかなえようって言いました！』 『いや…ふむ、そんな事なら、言ったかもしれん…むしろ私の口癖なのだからな…』 『なに一人でぶつぶつ言っているのですか。約束は守ってもらえるんですか、もらえないんですか、え？』 『……………』 『今日こそお願いしますよ。約束なんですから。 悪魔はまたマントをひろげて目を光らせた。 『そ…そんな顔して脅したって、だめですよ。 『よし！よくわかった。お前の願いを聞いてやろう。さあ！』 『ありがとうございます…ほ…ほんとにいいんですか？』 『さあ、願いを言ってみるがいい！ ただし、三つ数えるうちにだ。 『え？、あ、あの…』 『いち…に…さん！』 おお慌てで願い事を考えてみたが間に合わなかった。 ……悪魔は素早く三つ数えると煙りのように姿を消し、 部屋には風が吹いていた。



られずに泣いていたグーニー君も、日に日に成長を遂げてきています。これからは雄猫一匹グーニー君もいったん表へ出れば七匹の敵が現われるでしょう。障子を食い千切る勇氣を、いよいよ真の敵へしめす時もそう遠い話ではありません。グーニー君の暑い夏はまだこれから始まるようとしています。

to be continued

お知らせ

前回紙面にてお願いしました。6匹の内5匹のもらい手が決まり、最後の1匹はミルクホールですくすくと成長しています。子猫の里親になって下さった方々、本当にありがとうございました。

internet

http://www.milkhall.co.jp/

ミルクホールタイムスは、インターネットのホームページに掲載しております。メッセージボードへ、ご意見ご感想、身近な面白い情報等お待ちしております。

SIMPLICISSIMUS

